

江戸百景 by 西岡恒憲(41回)



→「写真」平成24年5月に開業したスカイツリーを、駒形堂を背にして隅田川西岸から撮影した。写真左端高速道路下に見える橋は吾妻橋。左下合成は赤く塗られた駒形堂。

←「左図」百六十年前の安政年間の安藤広重による浮世絵版画「名所江戸百景」より「駒形堂吾妻橋」で、同じ場所を鳥瞰図で描いている。左下に駒形堂が見える。駒形堂の屋根のところ小さく吾妻橋が見える。見上げれば、一天俄かにかき曇り、不如帰が一声鋭く鳴いて横切り、夕立が来た。



江戸百景(吉)

平成24年5月22日に東京スカイツリーが開業した。初日は20万人の見物客があったという。この日は強風で、用心のため時々エレベータを止めざるを得なかったというおまけ話がついていた。

翌23日は好天気で、スカイツリーを撮影するため浅草へ行った。本所へ行かず何故隅田川の対岸の浅草へ行ったかという、上図に挙げた広重の「駒形堂吾妻橋」の視点からスカイツリーを見てみたかったのだ。

広重の版画は百六十年前の幕末安政年間のもの。当然だが、これほど変わり果てた風景はない。変わらないのは駒形堂の屋根の形と墨田の流れだけ。

駒形堂には馬頭観音が祀ってある。江戸初期の奥州街道(日光街道)は駒形堂の西側を通り、浅草馬道から今戸の方に抜けていた。(江戸後期には千住の方を通ることになる)。

江戸後期、吉原通いの遊び客は柳橋あたりから猪牙舟(ちよきぶね)もしくは屋根舟に乗って、浅草御蔵の首尾の松に今夜の首尾が良いように願をかけ、駒形堂の前を過ぎ、山谷堀の入り口で舟を降りて、後は陸路(日本堤)を徒歩で吉原へ向かった。帰りはその逆で江戸へ戻る。

江戸初期の話だが、仙台公伊達綱宗の愛妓、吉原三浦屋の二代目高尾太夫(万治高尾)が、帰りゆく綱宗公に手紙を書いて、文使いに追い駆け届けさせた。...御館の御首尾はいかにと、忘れねばこそ思ひ出さず候、かしこ君はいま駒形あたりほととぎす。という手紙が綱宗公を益々燃え上がらせたという伝説がある。遊女の手紙は客を自分に繋ぎ留める手練手管なのだが、しかし、これは名文・名句ではある。(41回 西岡 恒憲)



↑安藤広重の比較的初期の浮世絵風景版画集『東都名所』より『永代橋深川新地』。天保二年(1831)頃に描かれた永代橋。右端の帆を下した大船をもやつてある所が佃島。対岸の深川洲崎の突端に見える高樓は深川七場所と呼ばれた岡場所の一つ「新地」である。江戸の海に白帆が浮かび、橋上を様々な職業の人が行き交って、爛熟期の江戸の繁盛を見せている。この頃は、深川の岡場所は吉原の「北里」に対し「辰巳」と称されて、江戸っ子の典型である辰巳芸者の全盛期であった。



↑左図と同じ方向から撮影した現在の永代橋。右端の超高層マンションのある所が佃島



↑江戸三大祭りの一つ深川八幡祭の六十挺以上の戻り神輿が永代橋上を数時間かけて通過する

隅田川に架かる橋は当初(江戸初期)は千住大橋だけであった。それから江戸の安定と発展に伴い、両国橋、新大橋、永代橋、吾妻橋の順に架橋されてゆく。千住大橋を除いて一般に「四橋」と呼ばれた。四橋とも大川の増水で流されたり老朽化したりして何度も架けかえられながら幕末に至っている。永代橋は元禄九年(1696年)五代將軍綱吉の五十の賀として初めて架せられた隅田川の最下流の橋である。

永代橋には歴史的に名高い事件があった。文化四年(1807年)八月の深川八幡祭の時、祭り見物の群集が橋の上が真っ黒になるくらいに参集して、その重みで永代橋が落橋し、実数で千五百人ほど溺死したと伝えられる大惨事が起きている。

〔41回 西岡恒憲〕

江戸百景(弐)

本年八月、江戸三大祭りの一つである深川八幡祭の三年に一度の本祭りが執り行われて、十二日(日)に六十挺以上に及ぶ各町神輿の連合渡御があった(本来は去年が本祭りであったのだが、東日本大震災のため、神輿の連合渡御は中止された)。

連合渡御のハイライトは、戻り神輿が富岡八幡宮に向かって次々と永代橋を通過してゆく光景である。なぜか永代橋を渡る時、神輿は肩に担がずに指したまま渡らねばならないらしい。数時間かけて六十挺が渡ってゆく光景はなかなか圧巻である。



↑ 広重「東都名所」より「隅田川花盛」天保三年（1832）向島「墨堤の桜」の花盛り。はるか遠く筑波山を望む



↑ 現在の「墨堤の桜」2013年3月 筆者撮影



↑ 現在も続く長命寺桜餅「山本や」

寛猛の間を通るだけの政治が施せる英雄的気質の人であった。英雄色を好むで、その方面にかけても凡ならざる人物であったが、お豊はこの人の側室として阿部家の奥に入った。しかるに安政四年（1857）阿部正弘は三十九歳で亡くなった。お豊を愛するあまり若死にさせられたと、当時は盛んに吹聴された。正弘死後もお豊は福山藩（阿部家）の奥深く住まっていたが、明治維新後に向島の生家へ戻ってきて、大正三年に七十五歳で向島で亡くなっている。

（41回 西岡恒憲）

今年の東京の桜の開花は例年より早く3月16日ごろから始まり、数日後に隅田川畔の満開の桜を撮影しに行ってきた。いわゆる「墨堤の桜」は、隅田川左岸（向島）の今の桜橋から枕橋までの1・3kmぐらいの間の並木桜を言う。古くは享保年間（1716～36）に八代將軍吉宗の命により百本程度の桜が植えられたのが並木桜の始まりだそうだが、本格的には、寛政二年（1791）の隅田川の川ざらえの時、土砂で向島の堤を高くして、その上に何度かにわたり、計数百本の桜を植えたのが始まりで、三十年後の文政期（1818～30）には江戸の名所になった。幕末期（1850～68）には、江戸の桜の名所は、向島墨堤、王子飛鳥山、品川御殿山、浅草寺奥山、上野寛永寺境内、武蔵小金井などがあつたが、最も賑わつたのは墨堤の桜であった。花見時の江戸中の人の足はまず向島へ向かった。向島土堤のすぐ裏に長命寺という寺があり、その境内を借りて桜餅を売り出した人がいた。「山本」という家で、寛政期（1795年頃）に売り始めたらしい。天保八年（1837）に桜餅屋の婆が六十四歳で死んだが、桜餅の店はこの老婆が寛政期に始めたというのが確からしい。土堤を高くして桜を植えこんだ寛政二年（1791）にはこの老婆も、鬼も十七、番茶も出ばなであった。

この長命寺の桜餅は、あんこを包むのにもち米を使わず葛粉を使った。今は小麦粉である。その上を二枚の塩漬けた桜の葉で包んだ。今は三枚である。これが江戸風の桜餅ということになったが、山本屋の「長命寺の桜餅」だけが突出して有名である。

老婆の孫娘のお豊は天保十一年（1840）に生まれて、無類の美女と当代の評判にされた。お豊は錦絵に描かれるほどの美人であった。その頃の山本屋の「桜餅」は墨堤の名物になっていた。この美人のお豊さんを見染めたのが、時の幕閣の首班・老中阿部正弘である。阿部伊勢守正弘は天保十四年（1844）に二十五歳で老中に列し、嘉永（1850頃）にはもう総理大臣の位置をしめていた。この人は江戸三百年間でも稀有の政治家・外交家であった。幕末四賢侯（島津斉彬・他）を引き立て、水戸の烈侯徳川斉昭を手玉にとり、江戸城大奥を手なずけ、

江戸百景（参）

墨堤の桜・長命寺桜餅



↑現在の「上野広小路」(2013年9月筆者撮影)。上野松坂屋と広小路の奥に上野の森が見えるのは右図と同じ。



↑広重浮世絵版画「名所江戸百景」より「下谷廣小路」(安政三年-1856)。右図の矢印の方向を描いている。図中右側の大店はいとう松坂屋で明和五年(1768)より現在までこの場所にある。



↑江戸切絵図「東都下谷絵図」(文久二年-1862)下谷廣小路(上野広小路)、不忍池、上野寛永寺黒門などが分かる。不忍池の水を隅田川に流す忍川が広小路を横切っていて、そこに三橋(みはし)と呼ばれる三つの橋が架かっていた。



↑現在の「上野の山」の入口。右図に対応するもの。三橋の辺りから撮っているが、橋の架かっていた忍川は現在暗渠である。石垣は江戸期のものが一部保存的に残されている。上野戦争で官軍と彰義隊の黒門前の激戦を見てきた石垣である。



↑上図の遠景の拡大図。広重の描写の正確さに驚く。広小路を横切る忍川と三橋が描かれて、その先には寛永寺域への入口の石垣と上野の森がある。図には見えないが左方に寛永寺総門の黒門がある。

下谷廣小路は現在の「上野広小路」のことである。広小路というのは江戸時代に火除け地として設けられた空地で、非常に幅の広い道路になっていた。下谷廣小路は将軍家が筋違い御門を出て寛永寺(と上野東照宮)に参詣する御成り道でもあった。寛永寺総門である黒門より半丁ほど手前に、不忍池の水を隅田川に流す忍川という掘割が下谷廣小路を横切っていて、そこに三つの橋が架かっていた。三橋(みはし)と呼ばれたが江戸っ子は三枚橋と呼ぶことが多かった。三橋の内、中央の橋は将軍家の御成り橋で将軍の行列以外は通行禁止であった。

広重の版画にあるように上野の森に向かって廣小路の右側に「いとう松坂屋」の大店が描かれているが、実はこの前年の安政二年(一八五五)の大地震で松坂屋は全焼し、一年後に再建されたばかりの建物である。この絵は再建された松坂屋を前面に持ってきて宣伝している絵ではないかと推測する人もいる。松坂屋は以前にも広重のスポンサーになったことがある。

三橋に付随するいくつかの伝説や作り話がある。下谷の義民佐倉惣五郎が中央の橋の下に一晚中隠れていて、翌日寛永寺へ参詣する四代将軍家綱に橋の下から直訴状を差し出したという話は江戸時代の小説に書かれたままの作り話である。また、幕末期、安政の大獄で刑死して小塚原に埋葬された吉田松陰の遺骨を改葬しようと、高杉晋作を筆頭とした松陰門下の長州藩士数人が、松陰の遺骨を掘り返して小塚原からの帰り道、騎乗の高杉以下、わざと三橋の中央の橋を渡ろうとした。青くなった橋番の役人が飛んできてとがめると、高杉は「勤皇の志士松陰吉田寅次郎の殉国の霊がまかり通る。橋番、さがれ、勅命である」と言い捨てて押し通った。橋番はなお追いついて来て「名を名乗れ、名乗らんか」とわめくと晋作は馬上振り返りざま「長州浪人高杉晋作」と言った。これは司馬遼太郎の小説にも出てくるいかにも高杉らしい逸話だが、史実ではなく、後世の人が作った話を司馬先生が採用したものらしい。

下谷廣小路と上野の山に関するもっとも有名で確実な史実は、慶應四年(一八六八)五月十五日の戊辰の役(上野戦争)に於ける官軍と彰義隊の黒門前の激戦である。官軍の先陣は三橋あたりに布陣し彰義隊の先陣は黒門内にあったが、彰義隊が黒門を打って出て壮絶な白兵戦が行われた。他の方面でも総力戦になり、午後五時頃には上野の山の彰義隊はほぼ全滅した。黒門は官軍の鉄砲により無数の穴が開いたままの姿で、南千住の円通寺に移築され同所に現存する。彰義隊の遺骸が円通寺に葬られた縁によるものである。

江戸百景(四) 下谷廣小路・上野のお山



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>より日本橋北詰一帯。
(下)歌川広重「東都名所」より「駿河町之図」(天保十年頃-1840頃)。通りの北側は呉服店と両替店があり、南側は綿店と麻店であった。



(右)現代の駿河町(上写真に対応)。左は三越本店、右は三井本館。現代は正面のビル群で富士は見えぬ。



(右)歌川広重「名所江戸百景」より「する賀てふ」(安政三年-一八五六)。日本橋北詰から北へ一丁程行った左側に駿河町という通りがあり、真正面に富士が見えた。通りの両側は全て越後屋呉服店に占められていた。

江戸百景(五)

駿河町・越後屋呉服店

江戸の昔にあったものが今も同じ場所にあるというのは江戸好きにとってこの上もなく嬉しいことである。越後屋の祖・三井八郎右衛門高利が江戸本町一丁目(間口九尺(約三米))の店舗を借り受け、越後屋呉服店を創業したのは延宝元年(一六七三)高利五二歳のときであった。その十年後の天和三年(一六八三)に店は駿河町に移転。高利は故郷の伊勢松坂に居たまま、江戸店(えどだな)を長男高平次いで次男高富に任せて、松坂から指示していた。程なく高利は京本店(西陣織具服の仕入れ店)に移動し、名実ともに江戸店持京商人(えどだなもちきよあきんど)として活動した。

越後屋呉服店の商売は他の呉服の大手とは最初からやり方が違っていた。他の大手は主として大名・武家・上級の商家を対象とした商いで、支払いが二節期払い(極月払い)の年一回か二回の支払いの掛売りであり、長期間資金が寝て、支払い遅れや貸し倒れが生じやすかった。そういう危険を見込んで価格を付けるから高価となった。これに対して越後屋は店前売り(たなさきうり)店さきで現金で小売(る)を行い、現金売りだから商品の安くすることができた。店の看板に「現銀無掛値(げんきんかけねなし)」と大書していた。また、商品別の担当者

(手代)を決めて、客の要求に細かく応えようとした。また、客の要求によって呉服物の切売り、小切れの販売をやってきめ細かく需要に応じた。

三井越後屋呉服店は大発展して、創業二七年後の元禄三年(一七〇〇)には、江戸本店は記録によると六八人の従業員(手代四五人、丁稚二三人)を抱えて、売上高は年商五万四千両(一日平均一五〇両)あった。これが宝永四年(一七〇七)には年商一二万三千両(一日平均三四〇両)に倍増しているが、以後幕末まで、何度も貨幣改鑄による物価の上下はあったが、あまり変化していない。江戸の需要が一定水準であり変化しなかつたと思われる。シーズンにより一日千両の売上もあったであろう。これを江戸時代は「日千両」といって、江戸には

その日千両の商いがあるところが三力所ある、駿河町三井、新吉原、魚河岸だと言われた。元禄頃の三井越後屋の繁盛を詠んだ俳諧・川柳に「越後屋に衣(きぬ)裂く音や衣替え」「駿河町疊の上の人通り」というのがある。前者は其角の句である。切売り小切れ販売をやるので衣裂く音が盛んに聞こえたのである。西鶴の『日本永代蔵』にもこの店の様子がえがかれている。三井高利の始めた事業で忘れてならないものも一つある。三井両替店である。越後屋は江戸店開店直後から両替業務を行っていたが、駿河町へ移転後、店の一部に両替店を並置した。これが三井両替店の始まりである。当時は一般的に、上方からは高級手工業品はじめ多量の商品が江戸に送られてくるので、江戸から上方へ送金する必要があった。また幕府や諸大名は裏日本

や西日本の領地から収納する年貢を京や大阪で売りさばいて、その代金を江戸に送る必要があった。それぞれ送金の必要があったから両替商の手で送金の為替の取組を加減すれば現金銀を輸送しなくてすんだ。三井両替店は幕府の大坂御金蔵銀御為替御用(公金為替)を請け負って、公金を運用して大きな利益を上げた。呉服店と両替店は三井家の車の両輪であった。明治維新前後の動乱期に両店には危機もあったが、番頭三野村利左衛門等の働きで切り抜け、越後屋呉服店は三越百貨店として、両替店は日本最初の民間銀行三井銀行として、新たに設立された貿易商社三井物産とともに三井財閥の中核をなしていった。三越と三井銀行(現・三井住友銀行)は三三〇年間、かつての駿河町を挟んで同じ場所にある。

(四一回 西岡恒憲)

江戸百景(六) 江戸の夕立



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>より新大橋東詰一帯。(芭蕉没して150年後の切絵図である。)



(上)歌川広重「名所江戸百景」より「大はしあたけの夕立」(安政三年-1856)。



(上)現在の新大橋。江戸時代は、ここより200米ほど下流に架かっていた。

歌川広重晩年の浮世絵版画集「名所江戸百景」中に「大はしあたけの夕立」という絵がある。画集中でも屈指の傑作の一つである。新大橋の橋上で夕立に遭遇し、思い思いの格好で俄雨から逃げようとする人々、江戸の夕立の風情を、詩情豊かな筆致で描いている。この絵は、オランダの印象派画家ゴッホが油絵具で模写を残している。ゴッホは歌麿や広重の浮世絵版画に非常に強い影響を受け、日本に強い憧れを抱いていた。

新大橋という橋は隅田川で三番目に架けられた橋で元禄五年(一六九二)五代將軍綱吉のお声がかかりで着工し工期数か月で元禄六年冬に完成した。日本橋地区の浜町から深川方面へ大川(隅田川)を渡して架けられた橋である。一つ上流の両国橋の旧名が大橋だったので「新大橋」と名付けられた。この絵は日本橋側からの俯瞰図で、新大橋を隔てて、隅田川の上流の対岸を望んでいる。俄雨でくすんだように見える対岸に幕府の御船蔵(おふなぐら)があり、ここにはかつて將軍の豪華な御座船・安宅丸(あたけまる)が係留されていた。故にこの付近は安宅(あたけ)と呼ばれていた。

新大橋東詰から下流に一町ほど行ったところに、深川の掘割「小名木川」が大川に合流する落ち口があり、その近くの小名木川北岸に深川芭蕉庵があった。架橋工事中、庵に在住していた芭蕉は橋が完成するのを楽しみやがけかかちたる橋の上」と詠み、竣工の際には「有難や頂いて踏む橋の霜」とはしゃいでいる。それまで芭蕉は、江戸に入りすること数回、「野ざらし紀行」「鹿島紀行」「更科紀行」「奥の細道」などの旅と、そのあとの上方滞在から二年ぶりに江戸に帰り、深川の草庵を再興してもらって(第三次芭蕉庵)、そこに住んでいた頃である。芭蕉は第一次から第三次まで(芭蕉三七歳から五一歳まで)小名木川北岸のほとんど同じ場所に作られた。芭蕉には旅の名句が多いが、この深川芭蕉庵で詠まれた句も名吟が多い。人口に膾炙した「古池や蛙とびこむ水の音」「名月や池をめぐりて夜もすがら」などが代表句。芭蕉の完成を喜んだ芭蕉は、翌元禄七年五月に最後の旅に出立した。同年九月大阪で病を得、翌月永眠。俳聖芭蕉遂に墮つ。江戸の夕立の風情がどんなものだったか、江戸の古老が大正

年間新聞記者に語ったものが筆録されて残っている。『：(江戸の夕立は)西北から黒雲が湧き出して、日光筑波の雷がピカピカゴロリゴロリ、まず一陣の疾風が江戸へ突っかかって来て、やがてポツリポツリとやって来て、たちまちザアッと盆を覆す、馬の背を分ける豪雨。池はあふれる、鯉はのがれて、溝(どぶ)へ逃げ出す、もの小一時間、降って降って降り抜いて、ソレ蚊帳だ、ソレ線香だと騒いだ揚句、カラカラッと、一天が晴渡って、嘘のような好天気になるといった、あの夕立の豪快の景。

夕立の後は、虹が出る、荷馬車が半身ぬれて通る、雪駄を穿き直して出懸ける、陽がカンカッあたって、日ぐらしが鳴き出す、何ともいえぬ夏の爽快な、心をキレイサッパリ洗いあげてくれるといったもの。樹々の埃りも砂塵も、スッカリ洗い流して、緑が滴るほど、大地が翠色(みどりいろ)になるぐらい、あんないい心持が、夕立で味えたので、夏の夕立は楽しかったものだ。

広重や文晁あたりの絵に、夕立の篠突く雨を、思い思いの趣向で、駆抜けんとしているのがよくあって、興味を催させるが、雷のひどいものになると、頭の上であたまを打砕かれるような響がした。男でも荒胆(あらかぎも)を挫(ひし)がれたものだ。

夕立に逢った人々の狼狽(あわて)さ加減というものの、職人達が一番面白かった。左官、大工、家根屋(やねや)、瓦師といった連中が、自分達も面白半分逃げ出すのが、とても可笑しかった。いよいよ夕立が降り出したら、印絆纏(しるしばんてん)、荒縄の帯、駈出す連中の騒ぎ、大工はお手の物の即席下駄をこしらえる、麻裏の草履へ木切を打付けて駈出す。左官の土コネは、コネる盤(うで)台みたいなものを冠って行く。家根屋は家根板でうまく笠をこしらえてかぶつて来たのが、風で煽られ、バラバラになつてしまふなど、腹を抱えずにいられたかった……

(四一回) 西岡恒憲

江戸百景 (七) 佃島と隅田川白魚漁



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>より、隅田川河口の佃島。当時は佃島と石川島だけで、月島地区はない。現在の佃島・月島地区の三十分の一以下の面積である。



(上)歌川広重「名所江戸百景」より「永代橋 佃し満」(安政三年-1856)。永代橋の橋脚に半分隠れて白魚漁の四手網と篝火を描き、前方に船をもやった佃島を描いている。



(上)現在の永代橋の下から、上図と同じ構図で昼間に撮影。右に見えるのが佃島地区。左方は埋め立て地で広重の時代より陸地が大幅に増えている。

「江戸っ子」という言葉は比較的新しく、安政二年(一八五五)の大地震のあとの復興景気で職人たちの懐具合が良くなり、宵越しの銭は持たねえとばかり女郎買いに走り、昼間は芝居見物にうつつをぬかす、このように職人たちの景気が良かった幕末に、職人連中が自分たちを「江戸っ子」と呼んだのが始まりである。従って、武士はもろん上級町人達も、自分たちを江戸っ子と呼ぶことは、その後もなかった。その江戸っ子たちが女房を質に入れても口にしたがったのが初鯉であるが、初鯉が珍重される以前は、江戸っ子が最も珍重したのは、白魚である。隅田川河口で行う白魚漁は、幕命により、佃島漁民の専売特許であった。

江戸佃島の由来) 天正年間(一五九〇頃)、徳川家康が江戸入城に際し、遠州浜松の居城から撰津多田の廟所(撰津源氏)および住吉大神に参詣した時、神崎川に渡船がなす困っていた時、撰津西成郡佃村の漁民が漁船をもって家康の一行を渡したので、爾来、家康伏見在城の時も鮮魚供進の命を蒙る。その後、佃村の名主森孫右衛門が村内の漁民三十四名を率いて江戸に召され、江戸湾で漁を行い、江戸城の魚御用を勤めるようになった。慶長十八年(一六一三)八月十日、日本中の海川漁猟権の免許を与えられた。大阪兩度の陣にも佃村民は漁猟及び密使の役をうけた。寛永年間(一六三〇頃)、鉄

砲洲の東の干潟、百間四方の地を賜り、正保元年(一六四四)二月漁家を建て並べて、本国佃村の名をとって、佃島と名づけた。佃島の住吉神社は、本国撰津の住吉大社を勧請したものである。これより幕命により毎年十一月から三月まで白魚を取って幕府に差し出すこととなった。

多の漁舟が篝火をともしつらね、四手網を拡げて漁った。これを、毎年十月から三月まで続けるのである。この景が江戸の一美観として江戸人に賞され、浮世絵等の絵画に描き残されている。白魚は江戸人が特に好んで食べた高級魚であった。のちに白魚は次第に衰微し、鯉に取って代わられるのだが、白魚漁は明治時代まで続いた。江戸時代の白魚の料理法は現在と同じようなものだったらしい。二杯酢、吸い物、揚げ物、佃煮等があったらしいが、江戸人が最も好んだものは、新鮮な白魚を二杯酢で食することだったであろう。その次に、白魚の吸い物を好んだと思われる。白魚の味がどれほどかわったか。白魚をふるひ寄せたる 其角 四つ手かな

「月も朧に白魚の簞も霞む春の空・・・」歌舞伎「三人吉左廓初買」お嬢吉左の冒頭のセリフ(黙阿弥作) 白魚やはばかりながら 江戸の水 竹冷 (四一回 西岡恒憲)



(上)切絵図の矢印の地点から撮影した現在の佃島。掘割と橋の場所は江戸期のままである。

江戸百景 (九) 猿若町芝居



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>幕府は、浅草寺の東北方にあった丹波園部藩小出家の下屋敷を収公し、約一万坪の敷地に江戸三座を移転させた。この地は初代猿若勘三郎にちなんで猿若町と名付けられた。



(上)歌川廣重「東都名所」より「芝居町繁栄之図」(天保末年-1844頃)。猿若町の通りを南から描いている。左側、木戸の上に櫓が上がっているのが芝居小屋で、手前から中村座、市村座、森田座(河原崎座)の三座が並ぶ。



(上)上図と同じ場所を同じ方向から筆者が撮影(浅草六丁目付近)。今は小さなビル群の谷間になっている。芝居小道具を作る会社の看板が出ているビルがあるのが、わずかにかつての芝居町の面影をとどめている。

俗に江戸の娯楽は男は遊郭、女は芝居見物、と言われたものだが、寛永期(一六二四~一六四四)の初代猿若勘三郎に端を発する歌舞伎芝居は、時代が下るにつれて盛んになり、江戸文化の爛熟とともに文化文政期に最盛期を迎えた。その後、天保の改革により浅草猿若町に移され、幕末から明治へと続いた。幕末の三十年間は公許の芝居小屋のある場所は猿若町に限定されていた。即ち、中村座、市村座、森田座(河原崎座)の江戸三座(猿若三座)がそれである(猿若町には他に人形芝居の結城座と薩摩座があった)。天保十二年(一八四二)以前は、中村座は堺町(日本橋)、市村座はすぐ近くの葺屋町、河原崎座(森田座)は木挽町(銀座)にあったが、水野忠邦の天保の改革で、町人の贅沢禁止、風紀取締りの一環として、江戸三座は浅草の奥山(浅草寺の裏手一帯)の方

面である猿若町に移転させられ、こゝ以外での常設の芝居小屋は禁止された。天保の改革は、庶民のあらゆる娯楽に掣肘を加え、特に歌舞伎に対しては、希代の名優と言われた七世市川團十郎を奢侈を理由に江戸所払いにしたり、役者の交際範囲や外出時の服装まで限定するなど、弾圧に近い統制を行った。

江戸日本橋という都会から浅草田圃の近くに移転させられた芝居小屋は、当初は人も出も少なく寂びれていたが、水野忠邦が失脚して天保の改革が頓挫すると、芝居好きの江戸人の足が段々に浅草に向き始め、天保の改革後の世相の退廃も相まって、再び庶民の娯楽の王者として繁栄するようになった。浅草寺参詣を兼ねた芝居見物客が連日この地に足を運ぶようになり、幕末の猿若町は、この地から西北方すぐのところにある新吉原と斜めに呼応して華やかな鳴

物気分を漂わしていた。猿若町時代の歌舞伎役者と狂言作者

猿若町時代の主な役者としては、四世市川小團次、八世市川團十郎、三世澤村田之助、十三世市村羽左衛門(後の五世尾上菊五郎)等がいた。天保以後は世の退廃とともに歌舞伎演目も白波物のような生世話物が多くなった。狂言作者として猿若町時代に最も活躍した二世河竹新七(河竹黙阿弥)と組んで、「三人吉左」や「村井長庵」の人気狂言をやった四世市川小團次がもっとも代表的な役者と言えるだろう。また黙阿弥の「弁天小僧」は五世尾上菊五郎が初役だった。この時代の狂言作者は他に「切られ与三」や「佐倉義民伝」を書いた三世瀬川如皐もいた。「切られ与三」は八世市川團十郎が初役だった。

江戸時代の芝居小屋

幕末に築屋トンビだった老人が大正時代に新聞記者に語り残した話がある。猿若町の芝居といっても、見物小屋同然の粗普請で、屋根こそ

あるが天井は荒縄で縛った葦簀張りであった。昼でも暗いので舞台は蠟燭をつけ、役者の登場には釣り竿のような面明りをふりたてて役者の顔を照らした。小道具一切、実物というのではなく、箆筒でも長持でも、全て張り子であった。今(大正)の歌舞伎座などは電気ばかり明るくしてちっとも余韻があまりない。役者の声色が、役者の口から出て二尺で闇に消えるをもって、大いに余韻に富んでいた。と語っている。

江戸時代の芝居見物

江戸の芝居見物は大層なものだ。芝居興行は夜は禁止されていたので、朝の蓋明けがむやみ

に早く、見物の大部分は、前の晩から芝居茶屋に泊まり込んだ。幕末にある旗本の奥方が猿若町の芝居を見に行った話が残っているが、武家屋敷の多い番町を午前三時か四時に出て、ぶらぶら歩いて浅草猿若町に行き、まずは芝居茶屋に入り、朝飯を済ませてから芝居小屋に入る。夕方、芝居が打ち出してからまた茶屋にて休み、提灯を持った若い衆に雷門まで送られ、広小路から下谷、神田と過ぎて番町へ帰ると午前二時頃、草木も眠る丑満時の頃になるのだから、奥方は疲れ果てた。「前日は芝居見物の支度、翌日は疲れて何も出来ぬ。三日がかりの芝居見物だ」と語っていたそうだ。

猿若町芝居町の終焉

明治五年(一八七三)になると森田座が新富町に移り、他の二座も明治二十五年までに鳥越町、下谷二長町へと移って、猿若町は芝居町としての役目を終えてしまった。猿若町の全盛時代は幕末のわずか三十年ほどであった。しかし、歌舞伎芝居そのものはこれ以後も大いに盛況となつてゆく。



(上)歌川廣重「名所江戸百景」より「猿若町よるの景」(安政四年頃-1857年頃)。前掲図より十年以上後の猿若町を、前図と逆方向の北から描いている。夜の猿若町だから、芝居が打ち出した後、芝居茶屋の若い衆に送られて三々五々と家路につく人々だろう。

湯島天神



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>御茶ノ水の神田川北岸の湯島聖堂とその北側の神田明神から北へ六町歩けば湯島天神に着く。



(上)歌川廣重「江都名所」より「湯島天神社」(天保十年頃-1839頃)。絵の右下の坂が男坂、正面の坂がより緩やかな勾配の女坂。その向こうに不忍池と弁天島が望める。正月の景。



(上)上図と同じ場所を同じ方向から筆者が撮影。右下隅の石段が男坂、正面が女坂。左側に鳥居が少しだけ見える。今は周辺にビルが建ち並び、正面方向にあるはずの不忍池は見えない。

江戸時代の本郷を象徴するものとして、加賀藩前田家上屋敷の東大本郷キャンパス(湯島天神)であった。特に湯島天神の由来は江戸以前に湯島村の村人がやりの霊夢のお告げで、高台の北端の老松の下に祀ったのが嚆矢らしい。道真公を祀った再建されたい。何じも変わっているが、場所と同じところであった。

「湯島の白梅」
 江戸時代の湯島天神境内では、公許の富くじ興行が行われた。今でいう宝くじであるが、江戸の三富と言われた公許の富くじは、湯島天神、谷中の感応寺、目黒不動尊の境内で興行された。富くじにまつわる悲喜劇も、史実で残っているが、史実であるものは少ない。

「湯島の白梅」
 江戸時代の湯島天神境内では、公許の富くじ興行が行われた。今でいう宝くじであるが、江戸の三富と言われた公許の富くじは、湯島天神、谷中の感応寺、目黒不動尊の境内で興行された。富くじにまつわる悲喜劇も、史実で残っているが、史実であるものは少ない。

「湯島の白梅」
 江戸時代の湯島天神境内では、公許の富くじ興行が行われた。今でいう宝くじであるが、江戸の三富と言われた公許の富くじは、湯島天神、谷中の感応寺、目黒不動尊の境内で興行された。富くじにまつわる悲喜劇も、史実で残っているが、史実であるものは少ない。



(上)歌川廣重「名所江戸百景」より「湯島天神坂上眺望」(安政四年頃-1857年頃)。前掲図より15年以上後の湯島天神の雪の景。絵の右下隅に男坂、正面に女坂、その向こうに不忍池と弁天島。前掲図と同じ構図である。

梅雨あけし簾透く灯よ東京よ
 さみだれや門をかまへず
 直ぐ格子
 西岡恒憲

江戸百景(十一) 神田明神

神田明神社の由緒に関しては、江戸期の資料もその後には書かれた書物も社傳を元にして書かれているようだ。社傳によると、天平二年(七三〇)創建とあるからすでに約千三百年を経過していることになり、江戸で最も古い神社ということになる。

場所は芝崎村(後の神田橋御門内、現在の大手町)にあったが、中古長く荒廃し、神燈既に絶えんとするところを、徳治二年(一一〇七)二世遊行上人東行のみぎり、往古東国にて憤死したる平将門の霊を合わせて驚く葬り、神田明神と称えた。

現在に至るまで神田明神社の祭神は、恵比寿様、大黒様、将門様の三柱である。将門様は別にして恵比寿様・大黒様が主神なので、商売の神様として神田明神は江戸庶民の信仰を集めた。

江戸の氏子は神田明神と日枝山王神社に二分されていたと言っても過言ではな

い。山王神社は徳川家の産土神(うぶすながみ)であり幕府に篤く保護されていた。神田明神は江戸市民の神様として主として江戸の町人に支えられた。

神田明神祭礼

神田・山王の両神社の祭礼は、江戸の二大祭りとして江戸の町民を二分して盛大に行われた。両祭とも、二年に一度盛大な「本祭り」を行った。間の年は静かな陰祭りで、派手な練物や神輿は出ない。

神田明神の祭礼は九月十五日と昔から決まっていた(現在は五月十五日に変更されている)。神田明神御祭礼と言えは、江戸前期から現代まで、何といつても本祭りの派手な賑わいに尽きる。各町より出された神輿や華麗な山車(だし)が多くの人々の目をひきつけたが、それを凌ぐほどの人気があったのが附祭(つけまつり)と言われた出し物であった。曳き物と呼ばれる巨大な張りぼての人形や踊り子に乗せた踊り屋台などである。

江戸の最盛期は文化・文政(一八〇四〜一三〇)である。神田祭はここに空前絶後の盛況に達した。当時の書物「江戸名所図会」にも「練物だんじり等善尽くし美を尽くし、町中を引渡す。是一時の壯観なり。この日都下の貴賤、棧敷をかけて見物す。・・・」とある。

幕末には江戸市民の内、零細商人や職人が「江戸っ子」を自負していたが、頭に血の多いのが、お祭りと言えは、分けがけが立つて、特に神田っ子の勢いは凄まじいものがあった。本祭りの年になると夏前から気がそわそわし、仕事も身が入らず、何とか祭りに参加して騒ぎ立て



(上)歌川廣重「名所江戸百景」より「神田明神」(安政四年頃-1857年頃)。前掲図より十日の出眺並村次郎の建ち並野平形「明神下」の主人住んでいて、野平形「明神下」と呼ばれている。野平形「明神下」の主人住んでいて、野平形「明神下」と呼ばれている。



(上)江戸切絵図く尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)。神田明神社は江戸時代に入ってから、神田橋外、駿河台、湯島台と転々として、現在の宮元町(千代田区外神田)に鎮座するに至った。



(上)歌川廣重「江戸名所」より「神田明神」(弘化年間-1845頃)。神田明神は湯島台地の東端にあり、東側は崖になっている(葦簀張りの向こう側)。崖下は下町で「明神下」と呼ばれた。



(上)上図と同じ方向から筆者が撮影。今は明神下には大小のビルが建ち並んでいる。

たいと願った。自分一人の着る祭り衣装だけでも非常に高価だったが、借金して祭り衣装を調え、祭当日は朝早くから夜まで狂いまわった。職人の親方ぐらゐの顔役になると自分の娘に豪華な衣装を着せて踊り屋台に乗せて一日練りまわさせるのが最大の願ひであった。天保の頃、須田町に或る大工の棟梁がいたが、大借金して、神田祭の踊り屋台におのが娘を出す。祭が終わってからは、どう算段してもその借金が返せず、とうとう九月の末に夜逃げしてしまつた。たぶん三百両もかかったのであろうと噂された。市井の江戸人は利口でないにもせよ、お祭り

夜逃げと一度にやる元気があった。「江戸っ子は女房子供を質に入れても祭に出る」と言われたが、実際、女房・娘を質に入れて資金を得て、祭りに浮かれる連中も多かった。「質に入れる」はもちろん比喩である。天保の頃だが、この風潮を平戸の殿様松浦静山公がその有名な隨筆「甲子夜話」で嘆いている。「尤も敷ずべきは軽賤の者、祭礼用意の衣服等の料に支ゆるとて、妻娘を妓に売置くは、町役人の罪といふべし」。

明治に入っても、神田祭の本祭りでは、多くの山車や附祭が繰り出し、明治十七年頃までは維新前同様に盛況であった。しかし追々道路上に電車の架線や電線が張り巡らされて、背の高い山車(花車、傘鉾等)は曳くことができなくなり、祭りの勢いは小さくなってしまった。現代の神田祭は五月十五日を中心に行われる。二年に一度の本祭りは、昔江戸中が浮き立ったほどの賑わいとは言えなからうが、見物してみると、その喧騒・繁盛ぶりに驚く。今は山車は明神境内に一台ばかりで参考としてあるだけで巡行はしないのだが、神輿の連合渡御の日は百丁以上の町神輿が、日本橋、神田、秋葉原、御茶ノ水周辺に繰り出し、囃子屋台は、葛西囃子の伝統を引く神田囃子を、笛、太鼓、鉦で賑やかに立して、神輿と一緒に町中を練り歩く。特に連合渡御最後の、百丁以上の神輿の明神社への宮入りの光景は圧巻である。また徐々に伝統的な附祭も復活してきており、現代の下町っ子だけでなく見物の万人を熱狂させている。

四一回生 西岡信憲

江戸百景(十二) 深川八幡 界限

深川八幡(正式名称は富ヶ岡八幡宮)の創建時期は諸説あり判断しないが、長盛上人という人により寛永期に実質的に創建されたと言うのが一番確からしい。当院深川洲崎は舟入地であり、ちゅう風浪に脅かされていたが上人は土地の開拓と埋め立てに尽力して、ついに六万坪の新天地を得た。そこで幕府の許可を得て、寛永四年(一六二七)新地の中央に八幡神社を建築し、近くに別当寺たる永代寺を建て、長盛自身、初代の住職となった。八幡神社の祭神(主神)は応神天皇とした。明治以前は神仏混淆であり、永代寺住職が神職を兼ねていた。広大な敷地を寄進しての創建以来、幕府の信任篤く、以後ずっと幕府から篤く保護された。

〈八幡宮繁盛の方策〉

しかしあまりに江戸から遠い



(上) 江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)。深川八幡前の広い通りが現代の永代通りとなる所。一の鳥居は現代の清澄通りと永代通りが交差する辺りにあった。二の鳥居は八幡の前にある。江戸時代の永代橋は今の永代橋より一町ほど上流にかかっていた。



(上) 歌川廣重「江都名所」より「深川富岡八幡」(天保年間-1840頃)。鳥居をくぐって行くのは左棧取った辰巳芸者衆であろう。左に見える石垣の奥に本殿がある。



(上) 現代の富岡八幡宮。奥に本殿が見える。(筆者撮影)

ので(開帳時以外の)平生は参詣人が少なく寂しかった。別当永代寺はこれを憂い、延宝年間(一六八〇年頃)、神社から二、三町の間に、腰掛茶屋と小料理屋を設け、みめよろしき女を雇い入れ参詣人の袖を引かせた。当時の八幡宮境内は現代よりずっと広大であったが、一の鳥居の外ばかりでなく、鳥居から内もその仕組みにした。たちまち満都の評判になり、参詣人が流れ寄った。酒の酌の間に、小唄を歌い、三味線を弾き、鼓を打った。それ以来富ヶ岡八幡宮はめきめきと繁盛した。神仏も女の力を待って栄えるようであった。

〈都の辰巳〉

こうしてできた深川洲崎の色町は、八幡宮とともに、ますます栄え、深川七場所と呼ばれる江戸を代表する岡場所となり、文化文政期(一八〇四〜一八三

〇)に最盛期を迎えた。七場所とは、土橋、櫓下、裾漕、門前仲町、アヒル、石場、新地と呼ばれた。特に門前仲町は全部が色町で最も賑やかなところだった。深川の地は江戸城から東南(辰巳)の方角にあり、新吉原を北里・北郭と呼ぶのに対し深川の色町は辰巳と呼ばれ、洲崎の芸妓は辰巳芸妓と呼ばれた。

〈辰巳気質〉

茶汲み女から出発した辰巳女の気質は、初めの頃は東北・松前から江戸湾に入ってくる船頭衆を相手にしていたので、船乗り特有のざつとばらんな気質が辰巳衆に感染した。意地と張り

と押しが強く、イナセでキャンであったが、単純と見る裏に都会人らしいデリカシーもあり、情にはもろく涙っぽやく、「よし分かった」と言えは本当によく分かったものであり「妾(わらわ)が引き受けた」と言えはどこまでも引き受けたのであり、借金して人を助け、一言の然諾に命を懸けるようなところがあつた。文化文政頃になると回漕業とともに発達した米商、材木商、魚商などの豪奢な生活に守られて、辰巳女の気質は、これら深川独特の寛闊大腹な商人気質から、船頭以外の都会的・俳諧的感化をこうむって、異常の洗練を遂げた。イナセとキャンの上に、都会的な粋が加わり、辰巳風という一種快艶な風俗が、浮世絵に描き残され、戯作本(人情本)に書き残された。

〈深川八幡の祭り〉

深川八幡の祭りは、山王祭、神田明神祭と並んで江戸の三大祭の一つであった。それぞれ特徴があり、「仇は深川いなせは神田人の悪いが廻町」と言われ、また「神輿深川山車神田だたつ

ハオリと呼ばれた。八オリと呼ばれた。岡場所の繁盛は吉原の営業を脅かすこと少くないので、吉原からは、たびたび当局者へ岡場所の取締りを請願した。それで辰巳もたびたび当局の手入れを受けたが、とうとう天保十三年(一八四二)三月、水野忠邦の天保の改革の一環として岡場所禁止令が出て、江戸の岡場所は雲散霧消し、その時を限りとして辰巳の色町も再び見られなくなった。しかし、辰巳を追われた女たちは、大川(隅田川)を渡り柳橋に紅い灯をともした。よってその後幕末明治を通じて、辰巳風は柳橋芸妓により正統的に受け継がれていったのである。

この三大祭は現代でも盛んで、特に深川八幡祭と神田明神祭は百丁以上の町神輿が繰り出す盛大な祭りになっている。深川八幡の二年に一度の本祭りは八月十五日を中心におこなわれる(神田明神祭は五月十五日)。深川八幡祭の歴史は古く、江戸初期から断続的に行われており、文化四年(一八〇七)八月十九日の祭礼では、やって来る山車を見物しようとして永代橋上に大群衆が押しかけ、その重みで橋が落下して千人近い水死人がでるという大惨事が起こっている。

(四一回 西岡恒憲)

江戸百景(十三) 日本橋 魚河岸

日本橋が架かったのは「江戸名所図会」によると慶長十七年より大分以前であろう、とあり、正確な架橋年の記述はない。三田村篤魚の考証によると、慶長八年(一六〇三)である、とある。「江戸名所図会」の記述と符合するのでこれを取ることにしよう。爾来、明治四十四年に石造りの橋にかけ替えられるまで、都合十二回の架け替えは全て木橋であった。

早い時期から、日本橋の南詰の西側には幕府の高札場があり、また北詰の東側一帯がいわゆる魚河岸・魚市場であった。

江戸幕府開府以来、江戸の漁師(主に佃島)や魚商は幕府や諸大名の魚御用を主に務めていて、余った魚を日本橋の袂で売り始めたのが魚市場の始まりである。魚河岸は寛永度(一六二四—一六四四)からこの辺にあったのだが、天和頃(一六八二頃)から諸大名をはじめ、江戸市民上下も次第に贅沢になって、魚の

需要が高まり、魚河岸・魚市場もだんだん広がって五町にわたるほどの大きなものになった。

文化文政期(一八〇三—一八三〇)頃には「船町・小田原町・安針町等の間、悉く鮮魚の肆(いちくら)なり。遠近の浦々より、海陸のけぢめもなく、鱗魚をここに運送して、日夜に市を立てて甚賑へり」(江戸名所図会)という殷賑の地であった。

「江戸っ子」

この魚河岸の労働者が江戸後期には「江戸っ子」の中の江戸っ子を自負して、向う鉢巻で「なんだ？ペラボーめ」とやった手合いだ、実際、魚河岸の仲間内でも縄張り争いや魚取引のもめごとなどで毎日のように喧嘩があったという。魚をさばく包丁を振り回してやるのだから、何とも物騒な喧嘩であった。

しかし江戸っ子は何もこの河岸っ子に限ったことではない。神田っ子、深川っ子など地域によって少しだけ気質が

違ふが同じ江戸っ子がいる。江戸っ子という言葉が認識されだしたのは江戸時代も五分の四を過ぎた頃で文化文政期以後である。十一代将軍家斉(いえなり)の頃でこの頃何度か大々的に貨幣改鑄が行われ、いわゆる悪貨が市中にあふれ、インフレが進み、まあ言わば江戸時代のバブル期であった。ただし、文化的には江戸文化の最盛期でもあり、太田蜀山人、山東京伝、その他の才人たちが大いに活躍した時代であった。

江戸っ子の住んでいた地域というのは、いわゆる下町で、現在の下町より非常に狭い地域で、日本橋、神田、京橋、新橋といういわゆる城東地域であった。

江戸っ子を自称したのは最下層の細民で、江戸の町民でも、地主、家主、店持ち商人、店借り商人、商家奉公人等、比較的中・上層の町民は自ら江戸っ子とは言わなかった。職業としては、魚河岸の労働者、船頭、棒手振り、仕事師(火消し人足)、職人、中間(ガエン)、等が主なものである。もちろん幼時より教育

なんてものは受けてないから無学文盲の徒が多かった。

江戸の人口は八〇万とも言われているが、武家、寺社等を除いた町奉行支配下の町人は五〇万とも見積もられている。この内約5%の二・五万人が、熊さん、八つつあん、べらんめえの手合いだと言つた。

当然みな裏店(裏長屋)住まいのその日暮らしの貧乏人で、いわゆる「宵越しの銭」は持ちたくても持てなかった。「たとえは職人でも高級な部類であった大工の収入は、正月だとか節句だとか雨風の日を除いて一年間に二九四日働くとすると、一貫五八七匁六分(一貫五匁八匁六分)の収入になり、それが夫婦に子供一人の暮らしたで一貫五匁四匁六分残ることになる。しかし家族が増えればとても暮らしが立たない。」

(三田村篤魚) 小商いをする棒手振り(振り売り)の場合は一日の売り上げを七〇〇文と見て一日の生活費用、店賃(家賃)、子供の小遣い、等で二八〇文、翌日の仕入れ代金三五〇文を

除けて残り七〇文を竹筒の貯金箱に入れる。大体一〇〇文で現在の金一、千円ぐらいか。

「宵越しの銭は持たねえ」と江戸っ子が強がり出したのは、やはり化政期以降で、江戸も後期になると物売りよりも、職人や仕事師や人夫のよりうな労働取りが多くなった。「稼ぎさえすれば金になる。腕から金が出る、夜が明ければ労働金が取れる。大風や大火事があれば賃金が三倍にも五倍にもなる。浮いた金が入ってくる。それに浮かされて、今日は今日で日を送る。それがいつまでも続くとに思っている。」(三田村篤魚)という能天気な後援観念の江戸っ子気質が醸成された。江戸っ子から言え、後家婆アか三びん土(さむれえ)のほかに貯金なんてするやつはない。

川柳の「江戸っ子の生まれぞこない金をため」という風になつてしまった。金銭にきらいであるとか、流れ川で尻を洗ったようだとすることは、そうした欲から超然としていたわけではなく、ただうかうかとしていたのである。

「その後の魚河岸・魚市場」

魚河岸・魚市場は草創以来三百年間、日本橋北詰にあったが、大正十二年(一九二三)の関東大震災で壊滅し、その年の内に築地に移した。ヤツチャバ(野菜市場)も一緒に築地市場として、現在に至っているが、二〇一八年には豊洲に移転する。



(上) 江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>日本橋北詰の東側一帯が魚河岸・魚市場であった。



(上) 歌川廣重「名所江戸百景」より「日本橋雪晴」(安政四年頃-1857年頃)日本橋北詰から南西を望んだ俯瞰図。右下に見えるのが魚河岸と魚市場。日本橋川の水の上には朝早くから多くの荷船が行き交う江戸一の殷賑の地だった。



(上) 上図と同じ方向から(魚河岸の跡地から)、現在の日本橋を撮影(筆者)。昔日の面影はない。

「四一回 西岡恒憲」

江戸を語るとなると、吉原はどうしても避けて通れない。幕藩体制下の江戸の娯楽というものは、現代に比べればはるかに少なく、最大級の娯楽といえ、江戸三座の芝居と新吉原であった。江戸の三大祭や両国川開きは一時的なものでもあり、両国広小路や上野山下の賑わいも江戸っ子にとっては楽しみではあっても極め付きの娯楽と言うほどのものではなかった。

限られた紙面なので、吉原に関する種々の逸話や遊女列伝、遊女の階級の変遷等は省いて、新吉原の成立と歴史を平板に見てみよう。

権現様(家康)の江戸開府以来、江戸は男の地であった。当初は相次ぐ土木工事で全国から人夫が集められ、それらが住み着き、すぐ後には各大名とその家族や家来が江戸定府となり、国許から出て江戸屋敷に詰める各藩の武士達は今で言う単身赴任であった。



(上) 江戸切絵図<尾張屋清七版 嘉永頃-1850頃> 遊客は山谷堀出口の今戸橋で舟を降りて日本堤(山谷堀の土手道)を徒歩または駕籠で新吉原に向かった。

その後も江戸の発展に従い、江戸周辺地域の百姓の次男三男四男が職を求めて江戸にやってくる。そんなこんなで江戸には上下の別なく独身の男が満ち溢れ、男の数が女の数を常に上回るという状態が幕末まで続いたのである。

江戸時代の人口統計は甚だあてにならないものがある。大体の人口の傾向は読み取れるので、参考のため嘉永六年(一八五四年)の統計を挙げると、男二九万五五二二人、女二七万九四七二人となっている。これは市街地だけ、つまり町奉行支配下の分(武家、寺社を除く)だけだが、飢饉に対するお救いのため人数改(あらため)をやった記録である。「しかし実際は、女の数が少ないというよりも、独身者が多い。土にしても町人にしても、江戸は独身者の多いところだったので。」

(三田村篤庵)

というように、旺盛な需要に答うべく、江戸の町のあちこちに自然発生的に娯楽が発生した。また上方から利にさとい商人達が来て意図的に娯楽を経営した。



(上) 歌川廣重「名所江戸百景」より「廊中東雲」(安政四年頃-1857年頃) 吉原の曙の図。頬がむりして朝帰りする客を見送る遊女が描かれている。この門は吉原大門(おおもん)ではなく、廊内の各町を仕切る木戸の一つである。

「そういう店が麴町八丁目と鎌倉河岸に十四軒つづ、柳町に二十軒余あった。(中略)その柳町には江戸土着の遊女が集まり、麴町には京都六条から移転した娯楽軒を連れ、鎌倉河岸には駿府弥勒町から移住した女たちがいた。」

(矢田挿雲)

こうして開府以後二十四、五年は娯楽の住所に制限は無かったが、元和三年(一六一七年)庄司基右衛門の献言により日本橋地区の葦原(よし)に土地を賜り、江戸中の娯楽を集めて、初めて一廓の花柳街が形作られた。葦原は縁起を担いで吉原と表記されるようになった。これが後の新吉原に対して元吉原と呼ばれる場所、今の人形町の辺りである。正方形に近い区画で二町四方の大きさであった。一町は約一〇九米なので二一八米四方である。江戸初期の日本橋は葦(よし)の生い茂る湿地帯であったので葦原もしくは葦原と呼ばれていた。今でも日本橋葦町(よしちよう)の地名が残っている。

しかし日本橋一帯の市街が發展するにつれて、風紀上の理由で、吉原移転問題が何度

か幕府でも検討された。ついに、明暦三年(一六五七年)の振袖火事(明暦の大火)で吉原も烏有に帰し、これを機会に強制的に日本堤下の浅草田圃に移転させられることになった。

しかし吉原の年寄連もなかなかしたたかたか幕府と交渉し、いくつかの有利な条件を引き出した。それは新吉原の営業区域は旧吉原の五割増、即ち二町に三町の区域をゆるし、従来の営業時間は日中だけであったものを今後夜も女郎屋をしてもよろしいことになり、その上、一万五千兩の移転料を下げ渡してもらった。

別の感想になるが、この措置を見ても、封建の世に幕府が、決して庶民にたいして圧制を行ってはいなかった、という一つの証左だと思ふ。徳川幕府は権現様以来優れた治世を行っていたのである。

これが元吉原に対して新吉原と呼ばれ、昭和36年の赤線廃止まで二百年続いたのである。

新吉原の町割も元吉原と同じく、大門(おおもん)を入って仲之町、それに交差する左の町が江戸町一丁目、同二丁目、揚屋町、角町、京町一丁目、同二丁目と、いわゆる五丁目に区分されていた。

江戸の娯客が吉原通いをする代表的なルートは、猪牙舟(ちよきぶね)に乗り、隅田川を遡り、お蔵前の首尾の松に今夜の上首尾を祈り、山谷

掘の今戸橋のところで舟を降り、後は徒歩か駕籠で日本堤を行き、見返り柳のところから左手に土手を下り、衣紋坂の両側には二十五軒づつ計五十軒の茶屋が並び、大門に入る前に軽く腹ごしらえをしたり編み笠を借りたりした。旧幕時代の遊蕩児は遊蕩は悪事であるとかやんと心得て隠したのである。このため五軒の茶屋は編み茶屋とも呼ばれた。(四一回 西岡恒憲)



(上) 右図と同じ方向から撮った現代の見返り柳(筆者撮影)。道路は日本堤通り。ビル群の後方には暗渠になった山谷堀がある。



(上) 歌川廣重「東都名所」より「新吉原日本堤衣文坂曙」(天保五年頃-1833年頃)。手前の吉原大門に続く衣文坂から日本堤へ上がるところを、朝帰りの遊客が駕籠や徒歩で帰っている。曲がり角に見返り柳が描かれている。ここで朝帰りの客が名残惜しげに廓の方向を振り返ったので見返り柳と呼ばれた。

江戸百景(十五)

新吉原(続)

新吉原の話の続きを(今日の良識に照らして甚だ不穏当な表現も少々あるが)可能な限り史実に忠実に書いてみる。

文政八年(一八二五)の記録によると、新吉原の女郎屋の数は次の通りである。女郎屋には上中下があり、上から順に言うとう、大見世(惣籠、そうまがき)三軒、中見世(半籠)十七軒、小見世(惣籠)百二十軒、小格子十八軒、長屋七十四軒。

大見世には一分(四分の一)より安い女はいない。いわゆる「全盛遊び」をする第一級の遊女(花魁、太夫)は一両から一両三分である。下の方は、小格子(一名チヨン、チオン格子)と、更にそれより下の長屋になると百蔵という百文の女が居た。しかし百蔵も文政期には二百文に値上がりしていた。二百文といつても、半纏股引の並の江戸っ子には簡単に遊べる金ではない。やはり吉原は唯一の公許



(上) 江戸切絵図<尾張屋清七版 嘉永頃-1850頃> 遊客は山谷堀出口の今戸橋で舟を降りて日本堤(山谷堀の土手道)を徒歩または駕籠で新吉原に向かった。

の遊郭だけあり、他の場所にある岡場所とは格が違っていた。

吉原の大見世は、役者・芸人は一切上げなかったそうである。小見世でも半纏股引の手合いは上げない。熊さん八つあんの手合いはチヨン、チオン格子が長屋でなければ上げなかつたのである。

第一級の花魁は「呼び出し」といつて、自分の娼家では見世を張らない。同じ家でもより下級の遊女は見世を張るけれども、第一級は、新造・禿(とく)というような自分の取巻き共を大勢引き連れて仲之町の茶屋へ出かけて行き、客を連れて自分の家へ戻ってくる。つまり客は娼家に直接花魁を尋ねることはせず、まず仲之町の引手茶屋へ行き、そこから花魁を呼んでもらうのである。当然客は一両三分の揚代だけでは済まないことは明らかであろう。

まず茶屋で、花魁を迎えて、客は暫時酒盛りをする。そのとき、芸者を呼んで賑やかにやる。このときの入用(費用)が、茶屋へ上がり代が三分。芸者二人に二分、芸者新造に一分、茶屋雑用が二朱、茶屋

の亭主の祝儀に二分。ここまですでに二両二朱(現在の金で二十五万円程度)かかっている。それから、花魁の家へ送られるのだが、この時は花魁一行が先立ちになり、茶屋の亭主、芸者が二人、箱屋、茶屋の女房・娘、下男、下女と大変な同勢になって娼家へ繰り込むことになる。

吉原の三大景物といえは、春の夜桜と旧暦七月の玉菊燈籠と八月の俄(いわか)踊りだが、これを書いていると長くなるのでまたの機会にゆずつて、三大景物に次ぐ花魁道中のことを書いておこう。

花魁道中はまあ言わば、遊女の大道宣伝である。旧幕時代に発達した足の芸術では、なんとといっても花魁の八文字と大名行列の槍持が両大関であった。吉原の遊女は廓外へ出るのを禁じられており、それならそれで、新吉原の江戸町から京町の間を東海道と見立て、道中と称して歩いたのである。この描写は矢田挿雲翁の「江戸から東京へ第二巻」の見事な描写をそのまま引用することにする。

『旧幕時代に、親しく花魁道中を見た不良老年の話によれば、まず薦の者が二人金棒を

鳴らして、先駆を承わり、次にその家の若者が、花魁の定紋のついた箱提燈をたずさえて道を照す後から、花魁が若者に長柄の傘を差しかけさせて、そろそろと八文字を踏む。これに従うもの禿二人、抱え五六人、新振り、番新など称する男女数名、都合十余名の一行が、行に左側を通れば、帰りに右側を通れば、帰りに右側を通れば、帰りは左側を通れば、二三四町の東海道旅行を終えるのである。



(上) 「江戸名所図会」(化政期1830年頃)より「新吉原町」の部分拡大図。一番手前左右の道が山谷堀の土手道である日本堤。図左下に見返柳があり、日本堤から下る衣文坂、そこから蛇行する五十軒道の突き当りが大門口、そこから先が吉原の里。

花魁が道中に着るうちかけは、牡丹に唐獅子、雲に竜などの刺激的な模様を、金糸銀糸でゴテと縫いつぶし、白輪子(りんず)三枚裏ねの小袖に五つ紋をそめ、頭には玳瑁(たいまい)の櫛、珊瑚の笄(こうがい)を髻の脚のようにさして、素足に高い塗下駄をはき、両手を懐に入り、決して脇目を見据えず、水平線と平行に正面を見据えたまま、五十三次を全部買切つたようなすまし方で、まず左かかとの足から踏み出し、その位置を中心として、左方に半弧形を描きながら、踵(かかと)だけ下し、次に履物全体を地につける。次は右足を進めて、同じような体操を繰り返すのである。

この花魁のお通り筋にあたる茶屋の主人は、かならず店頭に出迎えて、ご挨拶を申し上げねばならない規則になっている。しかし花魁はこれに對し、お言葉を賜われるようなことはなない。ただ艶然一笑して



(上) 右図と同じ方向から撮った現代の五十軒道(筆者撮影)。右図と同じく道は蛇行している。左に現代の見返柳があり、信号の名称は「吉原大門」とある。

店頭に腰をおろし、主人が勧める長煙管で、煙草をくゆらすのみである。その代り花魁がもし茶屋の前で転ばば、そのはつとしてその茶屋に上り、総振舞をするようになった。これは費用よりも何よりも、遊女一代の大恥辱であった。たので、彼女等は、歌、俳諧、活花、茶事、琴曲の稽古の間に、この体操の練習を怠らなかつた。文武兼備というも悪かなりである。』
(西岡恒憲 四一回)

江戸百景(十六) 新吉原(続・続)

吉原の話の続きをもう一回。吉原へ通う客は、元吉原の頃はもっぱら武士階級であり、町人はいなかった。それが幕府の当初の遊郭設置の目的でもあった。戦国遺風がまだ色濃く、気風の荒い武士共を江戸に集結させたのだから、こういう施設も必要だったのである。

明暦三年(一六五七)に新吉原に移っても、延宝度(一六七三)までは、まだ大名衆の吉原通いがあつたが、延宝以後にはそれがなくなつた。元禄以後(一六八八)の吉原は、もう町人のものになつていった。

最上級の遊女(花魁)を太夫と呼んだが、もともと「太夫」は大名の相手をする遊女の階級のことであり、大名衆の吉原遊びがなくなつてから太夫もなくなつた。以後の遊女の最上級は「呼び出し」の花魁ということになるのである。

花魁(太夫)は奉公人といへ、大名に接する売物といふので素養も格式も主人(楼主)を庄し、用があれば、主人から花魁の部屋に向き、花魁の許しを得た後でなければ、座布団さえ敷けぬといふ。



(上) 新吉原<切絵図 1850年頃>



(上) 歌川廣重「東都名所」より「吉原仲之町夜桜」(天保五年頃-1833年頃)。吉原の三大景容の一つ「仲之町夜桜」の風景。花魁道中が見える。左の門が吉原大門



(上) 現代の吉原大門跡。上図と反対方向(大門の外側)より筆者撮影。道の両側の記念柱には「よし原大門」と書かれている。

くらしいの権式があつた。〈吉原名妓の話〉

江戸時代の吉原の高級遊女は芸事はもちろん、教養・見識も含めて、町の一般子女(武家も含めて)よりはるかに秀でていた。高級武家や商人を惹きつけた魅力もそこにあるのである。特に江戸中期以前の花魁には詩歌を解する者が多く、優れた作句・文章等が今に伝えられている。

三浦屋高尾の「君は今駒形あたり時鳥(ほととぎす)」「や、茗荷屋奥州の「恋死なば我塚で鳴け時鳥」や、若系の「宵々の待つ身にすらき水鶏(くいな)かな」や、瀬川の「夕立や嘘のやうなる日の光」等の名句が残っている。また瀬川の漢詩「風(いかのぼり)の賦」や、雲井の和文などは、そんじよそこの教養人を凌いだ。早い話が、雲井の「さとのらく書」などは、

「物売る声などことのほか

春めきて、長閑なる日影に大黒舞など舞ふ頃より、やや春深く霞渡りて、移し植えたる花も漸く景色立つほどこそあれ。折しも客足いと打続き、心せはしく桜散り過ぎて青葉になりゆくまで、只色に心を悩ます・・・といった調子である。

三浦屋高尾太夫 名にし負う高尾太夫は吉原京町三浦屋の抱え遊女であるが、初代から七代目ぐらゐまなど、遊女のまともな記録など、もちろん残つておらず、言い伝えられた伝説が残るのみである。各代の高尾太夫はその特徴であだ名をつけられて後世に言い伝えられた。子持ち高尾、仙台高尾、石井高尾、駄染(だぞめ)高尾、小袖高尾、等々。

一番有名なのは仙台高尾(二代目高尾太夫)であらう。仙台侯伊達綱宗を吉原へ惹きつけたのが伊達騒動の原因になつたように言い伝えられているが、伊達騒動の真因は幕府と伊達藩により隠匿され、本当のところはよく分かつていないらしい。

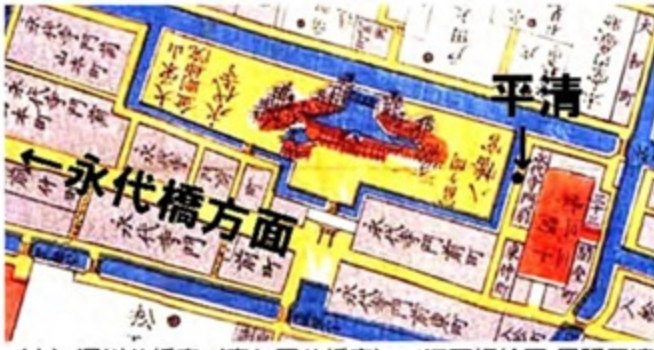
雲井 雲井は芝兼房町の菓子屋の娘で、継母の手にかかり、十九歳で吉原金屋三左衛門方に身を沈め、和歌、俳諧、国学、楷書を学んで、筆跡も見事だつたが、鼻窟の客が「女の楷書は殺風景だから、俺が封じた」と白濁で買取つて以来、女文字ばかり

書いた。「さとのらく書」を読めば、源氏物語や枕草子を精読していたことがわかる。どうも大変な女郎である。

・松廬家露八 遊女ではなく、幫間(太鼓持ち、男芸者)の話であるが、幕末から明治にかけて吉原に松廬家(まつのおや)露八という幫間がいて、幫間芸の名人といわれた。露八は、実は土肥庄次郎というれつきとした幕臣として生まれ、剣術も免許皆伝の腕前であつたという。しかし吉原通いで身を持ち崩し、勘当されて、食うてゆくの吉原で本職の幫間になつてしまった。

その後長崎へ流れて、やはり幫間をしていたが、戊辰戦争が始まると、どういうわけかお家大事とばかり江戸に馳せ戻り、兄弟と一緒に彰義隊に入隊し、野戦に参加した。戦は負け、敗走したが何とか生き残り、その後はまた吉原で幫間になり、死ぬまで幫間として世を過した。露八は、幫間がよほど性に合つていたので、旗本の跡取り息子として生まれ、一人前の武士教育を受けた男が、世間体上は落ちぶれ果てて、花柳界で太鼓持ちやつてゐる。しかし幫間の世界では一流と言われ、鼻窟にしている。勝海舟なども鼻窟にしている。一種の奇人と言えらる。明治三十六年十一月七十一歳で没。「死んだら、うちの菩提寺ではなく、彰義隊の野郎がたくさんいる(田)通寺に埋めてくれ」というのが遺言であつた。

江戸百景(十七) 平清・蕎麦の話



(上) 深川八幡宮(富ヶ岡八幡宮) <江戸切絵図 尾張屋清七版 1850年頃> 広大な八幡宮境内は四方を掘割に囲まれており、東側の堀の向かい(永代寺門前町)に平清はあった。

江戸の高名会席(一) <江戸で一番有名だった料亭(料理茶屋)と言えは並シリス「江戸百景(八)」で紹介した山谷の「八百善」だが、八百善と並んで江戸に名を轟かせていた料亭は深川八幡前の「平清(ひらせい)」であった。八百善はあまりにも有名な店で色々な書物にも書き残されているが、平清の逸話にはあまりお目にかからない。平清は文政四年(一八二二)に深川八幡前に堂々たる家を作った。辰巳(深川)の花柳界がもつとも殷盛を極めた時代である。現在は料理屋で風呂に入ることはほとんどないが、江戸では必ずといってよいほど料理屋の風呂を楽しんだ。料理屋も立派な風呂場を作って、客を迎えた。料理屋で風呂場の設備をしたのは平清が最初で、これが江戸っ子の



(上) 歌川廣重「江戸高名会席尽」より「深川土橋平清(部分)」(天保十年頃-1839年頃)。深川八幡宮東側の堀の向かい側の永代寺門前町に平清はあった。

の人気を呼び、ついに八百善と江戸料理界の覇を競うほどの名店になってゆくのである。以後同様の店が増えてゆくが、江戸っ子にとって料理を食う前に風呂へ入るのが流行になったという。これを湯治と称したらしい。平清開店のときのピラは太田南畝(蜀山人)が筆を執って、「・・・今度御



(上) 現代の深川八幡宮社殿。筆者撮影



(上) 歌川廣重「江戸高名会席尽」より「深川八幡前平清」(天保十年頃-1839年頃)。堀側の入口より描かれた。上図で小さく描かれた石灯籠が下図では大きく描かれている。

ヒイキ御引立をもつて、十番地へ湯治場料理店相始め・・・店開き仕候間、何卒当日より、お賑々しく来齋遊ば下候やう、偏に奉願上候、以上」と書いてやった。平清の料理は辰巳式といわれて、小魚類の新鮮さとその調理に一種の味があつたという。鰻、蛤、浅利などは深川名物であつたし、江戸前二ギリ鮎も深川で発達した。平清の会席料理は最後に必ず鯛の潮汁が出た。それは塩加減が絶妙で絶品の味だつたという。屋号の「平清」は、主人の平野屋清兵衛の名によるものだが、江戸川柳に「平清の奢りのすえもうしほなり」というのがある。これは「平清」を「平清盛」に通じさせ、平家一門が壇の浦でほろんだことと、平清の会席料理の最後に鯛の潮汁が出されることをかけた句である。それほど平清の潮汁は江戸中に有名であつた。



(上) 歌川廣重「名所江戸百景」より「虎の門外あふひ坂(部分)」(安政四年頃1857年頃)。赤坂溜池脇のあふひ坂の夜の景。屋台の夜鷹蕎麦売り。行燈に「二八そば」と書かれている。

蕎麦の話 江戸っ子は蕎麦をよく食つたらしい。畢竟、安かつたからである。蕎麦は甲州から江戸に入ってきたものらしいが、寛文年間(一六六一)から担い売りがあり、蒸し蕎麦で一杯六、七文であつた。当初は蕎麦切りは蒸し蕎麦であつたが、後に茹で蕎麦に変わった。蒸籠に乗ってくるが、冷たい蕎麦を蒸籠にのせて持つてくるのは元来おかしな話であるが、これは蒸し蕎麦の名残である。

「もり」といいう言葉は天明(一七八一年)頃から使われたらしい。つかはは当時は「つかは」と言つたが、だぶだぶとあつて蕎麦の分量も多し。「かけ」はその分量から「馬方蕎麦」と呼ばれて、それを食う奴は侮蔑されて「あいつは馬方蕎麦が似合う」などと罵られた。汁は辛くてこれを「江

戸汁」と言つたが、「かけ」の汁はそんなに辛くては食べられないので甘くして「甘汁」と呼んだ。当然前者が「江戸汁」で食うのが新吉原京町の三浦屋の遊女きちようは蕎麦が好きで「甘汁は愚痴だ、蕎麦を食つのは江戸汁に限る」と言つた話が伝わっている。江戸中期以降は店を構えた蕎麦屋も多かつたが、屋台の蕎麦の担い売りがそれ以上に多かつた。屋台売りは江戸では「夜鷹そば」と呼ばれて蕎麦が主でうどんが従であつたが、京阪では「夜暗きうどん」と言つて、うどんが主で蕎麦が従であつた。江戸では店売りも屋台の担い売りの「二八そば」という看板を掲げたが、この語源に関して三田村篤魚は次のように言っている。

「よく二八蕎麦と言うが、一体、一八、二八、三八と言ふのが蕎麦とうどん粉の割合だといつた説がある。しかしこれは当時でも一方に生蕎麦とか手打ち蕎麦とかいつて、全部蕎麦粉であることを呼ぶ物にする売り方があり、むしろうどん粉の分量を名称に表すとすればそれだけ蕎麦が悪いことになる。正味の少ないことを看板にするのはこれとおかしい。よつて昔から、二八と言へば十六文、三八と言へば二十四文という風に蕎麦の代価を表すというのが正しい。」



(上) 料亭「青柳」と「与兵衛鮎」<江戸切絵図 尾張屋清七版 1850年頃> 両国橋東詰に片葉堀という堀があり、この堀に面して青柳はあった。また与兵衛鮎は回向院正門の斜め前にあった。両国橋東詰から回向院までの地域はほとんど全域、回向院門前町の趣を呈していた。



(上) 現代の両国橋。幕末の両国橋は50メートルほど下流に架かっていた。その江戸の両国橋のあった場所から筆者撮影。今は片葉堀も駒留橋も跡形もない。



(上) 歌川廣重「江戸高名会亭尽」より「両国青柳」(天保十年頃-1839年頃)。東両国の「青柳」は片葉堀に面した側の入口に専用の棧橋があった。仲居が屋根船に仕出し料理を運んでいる。画賛には「青柳は妙月高く花火の夜」とあり、客と芸者が両国花火の見物に出るところ。

草九にのに寛衛いにのてかきり者、は、はう
業蔵歳生八靈政でた住裏、っ
前でま百岸年あるとん長本所い
下札浅れ、屋島間。兵で屋所い

て年を越せねばならなかった。
か、または鮎の昆布巻を売つ
後、あらゆる鮎屋は休業する
代は鮎は夏のもので、十月以
が三つも五つもある高い鮎
一個三つも五つもある高い鮎
衛鮎「松の寿司」などでは
かし最高級鮎店である「予兵
きのみが十六文であった。し
リはすべて一個八文で、卵焼
ご、等があった。以上の二ギ
は最高級鮎店である「予兵
衛鮎」の寿司などでは
一個三つも五つもある高い鮎
代は鮎は夏のもので、十月以
後、あらゆる鮎屋は休業する
か、または鮎の昆布巻を売つ
て年を越せねばならなかった。
〈西岡恒憲 四一回〉

江戸の高名会席 (二) 江戸時代の両国橋は、現在の両国橋より約50mほど下流にあった。その両国橋の東詰の北側に「片葉堀」と呼ばれる掘割があり、その片葉堀に面して料理屋「青柳」があった。近くには駒留橋という小さな橋があった。青柳は山谷の八百善、深川八幡前の平清と並び称される高級料亭であった。

青柳に関しては、「水川清話」に勝海舟が語った逸話が残っている。幕臣の海舟は若い頃、御三卿の一つ田安家の若殿付で田安家に参上していたが、「青柳」は、近所だったから、いつもそこで昼飯を食った。ある年の暮れ、海舟が例のとおり昼したくは青柳に行つたら、いわゆる年越しの準備で、なかなかの景気にみえた。しばらくするとかみさんが出てきて、いろいろと挨拶の末、一殿様、殿様には、私どもの暮らし向きは、とてもお分りになりません。殿様には、ちよっと景気がいいように見えませうが、実際のところを申せば、ただ今は家には金といて一文もありません。よし金がなくて苦しなくても、するだけのことはいたしておかないと、自然と人気が(じんぎ)が落ちてまいりまして、終いにはお客さんがこのものはサカナまで腐っているとおぼしめすようになったてしまいます。いかほど心の中では苦しめても、お客様方にはもちろん、家の雇い人へでもその心の底をみせるといけなくなる。この苦痛を顔色に出さず、じつと辛抱しております。どうか景気は回復するものでございます」と言つて、顔色も変えず、応対する様子を見て、海舟もひどく感心して、「お前、金が入用なら俺があげよう」と言つて、紙入れ(財布)の底をばらうて、三十両放り出してやった。その後しばらくたってから海舟が青柳

に寄ると、こんどは真実に一陽来復で、なかなかの好景気であった。そこでかみさんもいたく前日の礼をのべて、三十両の金を返そうとしたが、海舟はその金を突きつけて、「この金はお前にあげる。実は、この間のお前の話で俺もたいへんに良い学問をした。お前は、ちゃんと胸の中に孫呉の奥義をそらんじ、人間窮達の大哲理を了解しているのだ。この金は、かような結構な学問をしたその月謝と申して進上するから、取っておけ」といつて、三十両をくれてやったという。当時の高級料理屋の女将の心意気と海舟の性格が良く出ている話である。

寛政期(一七九〇年代)まで江戸の鮎と言えは大阪から伝来した庄鮎(おしずし)が主たるものであった。他には笹巻鮎、ちらし、稲荷鮎などもあって、寛政頃にはこれらの鮎は江戸中に流行り、よく食べられていた。庄鮎とは四角い鮎桶に鮎飯を詰め、その上へ具を載せて蓋をして三、四時間圧迫し、味がついた頃鮎籠(すしべら)で一區画つ切り取り梅の酢漬けを添えて客に出す。「口合ききます」といつてから三、四時間待たされるので、食通ぶつて気の短い根っからの江戸っ子には江戸前二ギリ鮎を発明した



(上) 与兵衛鮎は今の両国一丁目と二丁目との間にあった。その場所の「江戸風」の碑があり「江戸風」の地を初めて出で大いに繁盛した」とある。

男奉公し、十数年律儀に勤めた。その後道具屋、菓子商などをやったが片づ端から失敗した。長年札差業に勤めて通人趣味を身につけていた予兵衛老人はかねてから大阪伝来の庄鮎に惹かれたらなく思っていた。予兵衛はここに目をつけて文政初年(一八一八年頃)初めて今日のような二ギリを完成し、屋台店で売る鮎として商つた。江戸っ子らしく、屋台に不似合いな山本のお茶(当時の高級品)を汲んで出して、食い道楽の一般江戸人に大いに受けて、予兵衛の屋台鮎は大繁盛した。予兵衛は横網町の長屋を引き払い元町の表店(おもてだな「借家」)に移つて、家の前に屋台を出し、益々繁盛し、ついに隣の長屋も買つて改築し、客を座敷に通すようにした。これが江戸前鮎を代表する両国の「予兵衛鮎」である。その後予兵衛の繁盛を見て江戸前二ギリ鮎の店が江戸中に広がった。他で有名なのは浅草平右衛門町の「松の寿司」などがあった。幕末頃(一八六〇年代)には、卵焼き、車海老、芝海老をほろ、白魚、鮎、こはだ、あなご、等があった。以上の二ギリはすべて一個八文で、卵焼きのみが十六文であった。しかし最高級鮎店である「予兵衛鮎」の寿司などでは一個三つも五つもある高い鮎代は鮎は夏のもので、十月以後、あらゆる鮎屋は休業するか、または鮎の昆布巻を売つて年を越せねばならなかった。



(上) <江戸切絵図 尾張屋清七版 1850年頃> 神田川が隅田川に流れこむところにあった柳橋のもとに料亭「万八」はあった。



(上) 歌川廣重「江戸高名会亭尽」より「柳ばし夜景」(天保十年頃-1839年頃)。柳橋から見た万八楼が描かれている。橋を歩いているのは柳橋芸者。



(上) 現代の柳橋と、神田川と隅田川の合流点。現代の柳橋はアーチ形の鉄橋である。上の絵と同じ場所から筆者撮影。

江戸の高名会席(三〇) 今まで紹介してきた八百善、平清、青柳等、江戸中期以後の料亭の料理茶屋は、江戸の富裕階級や各藩の留守居、後、化政期の文人墨客等によく利用された。宴会・飲食等に利用されたことはもちろん、趣味人の多い前記階級の人たちがよく趣味の集會を催した。當時有名な画家・文士の書畫會、芸人の催し物、酒の飲み比べ、食べ比べなどの大集會場として、よく柳橋の「万八」の名が出てくる。

主人の名が万屋八郎兵衛、略して万八。神田川が隅田川に合流する地点にある柳橋の袂にあった料理茶屋である。天保七年(一八三六)に滝澤馬琴が万八で書畫會を催した時の手紙に「(略)万八楼は中座敷四十畳、左右二十四畳、別席十二畳、全部で百数十畳の座敷・・・とあり、大きな料亭である。書畫會のことを書いた他の文献にも「書畫會は當時の詩文書畫家の催す所にて會場は大概兩國橋の此方柳橋際なる万八楼をあてたり・・・」とある。

たと言われている。江戸の鰻は当初は辻売り(屋台店)ばかりで、定まった店を構えた鰻屋というものは、天明年間(一七八一〜一八〇四)まで無かった。天明のはじめ上野山下仏店(ほとけだな)で大和屋という店が初めて店売りを出す。その後に出た鰻屋として、神田深川屋、茅場町岡本、尾張町尾張屋、など名前が見える。寛政・享和の頃(一七八九〜一八〇四)には、江戸市中に鰻屋はまだ少なかった。それが天保(一八三〇〜)の初めになると、一町内に二、三軒あるところもあり、一町内にないところはないというくらい多くなっている。辻売りは幕末まで盛んであった。また、辻売りの一種で、舟で焼いて、両国の夕涼み舟に売る蒲焼もおおむね大串、中三串、小五串で二百文ぐらいであった。が、辻売りの鰻は安からうまずからうで、文化元年(一八〇四)頃で一串十二文から十文だった。辻売りの鰻の味は大変まずかった。うなぎを

辻でさき」という川柳がある。江戸前鰻 辻売りや鰻屋の看板や、江戸の案内本の広告には、よく「江戸前鰻」と書かれ、他に「厭離江戸前大蒲焼」「江戸前大かはやき」等、必ず「江戸前」という接頭辞が付いた。の蒲焼のことを指すようになつた。ちなみに江戸前というものは、「江戸城の前」ということである。正確には江戸城と隅田川の間の江戸城東側の狭い地域を指す。新橋、京橋、日本橋、神田ぐらゐまでの場所である。大抵、鰻屋のあるところは近所で鰻が採れることになつていて、産地に四つ筋目があつた。深川鰻は深川周辺で採れ、池之端鰻は不忍池で採れ、御藏前の鰻は吾妻橋の周辺で、あのあたりは御藏の米がこぼれるから、鰻がうまいと言われ、この鰻は神田川で採れ、筋目があつた。ところがこれら八百で、実際は、深川周辺で少しだけ採れ、あとの三ヶ所はほとんど採れなかつた。江戸前鰻もどこか別な場所から持ってきたのである。

いであつた。文化年中(一八〇四〜)の江戸に大久保今助という男が堺町の芝居の金主をして、非常な金方だから忙しくて鰻を食に行けない。では食いたいが取り寄せたの、だんだん考えた末、大きな井へ熱い飯を入れて使いに持たせてやつを持ってきて食うことを入れたやつを發明した。この今助の取り寄せ方がうまいといひるので、これがまず芝居町の裏屋で鰻飯を売り出した。やつが、これ以後、それ以後、たやつであり、鰻屋でも鰻屋が行わんだん、鰻屋では、鰻屋を食う奴は喜ばれなかつたので、少しましな店になると鰻屋のお客は二階へ上げず、下の焼いている傍で食わしたという。えらく軽蔑をしたものである。

江戸百景(二十) 浅草御蔵と札差

元禄(一六八八)から享保(一七一六)期にかけて目立ってお大尽ぶりを発揮したの紀文や奈良茂を代表選手とする材木商であったが、七、八十年後の安永(一七七二)天明(一七八二)頃、吉原を賑わした代表選手は浅草御蔵前の札差(ふださし)であった。

札差とは旗本の蔵米の受取から売買までを請負う商人のことである。千石以下で、知行地を持たない蔵米取り(俵取り)の旗本は、春夏秋の三期に分けて、幕府の浅草御蔵より扶持米を給された。初めは旗本の用人が自分で出頭して蔵米を受け取ったが、それらの用人が休憩する場所として、御蔵前に葦簾張り(よしずばり)の腰掛茶屋が並んだ(のが、札差商人の濫觴(らんしょう)である。休憩所は御蔵宿と称された。蔵米の受取は大変な手数と時間が掛かったので、やがてその仕事を御蔵宿の主人に委託して帰るようになった。いくつかの間には、蔵米受取売買代理人が本業となっていた。

その手数料(札差料)と払米口銭(は百俵の取扱いにつき三分(四分の三)であった。きぐつと時代は下るが、元治元年(一八六四)の記録によると、その年の蔵前札差百九軒の総取扱高は百五十三万六千七百三十余俵で、計算すると、手数料は百十五万二千五百四十六兩余となる。札差の数は、上限百九人から九十五人まで時により変動があったが、百軒で概算すると、一軒あたり年間一万兩以上の手数料収入になる。これだけでも豪商といえる。よいが、更に、札差の本業は、蔵米受取売買代理人業から、豊かな資金を生かして金融業へと移っていった。武土は口で「武士は食わねど高楊枝」といつても、蔵米が降りてくるまで待てず、札差に泣きついて、蔵米を抵当に借金をするものが多かった。その貸金の利子は、大体江戸時代を通じて月一割五分という高利であった。旗本の財政が年々逼迫するのにも反し、百軒内外の札差仲間には、年々身代が太った。札差

は、江戸の官僚(旗本)の死命を制するほどの勢力を持つに至っている。御蔵前にはこれら札差業者の広大な邸宅が軒を連ねていた。札差業者の中には町奴(まぢやっこ)のように豪侠な者があつた。この暴利の結果として、贅沢が、蔵前式の男伊達(おとこだて)を生み、一般の町人と違つた気分を持つようになった。「彼等には非常な驕気と街気があつて、俺こそ江戸の大買(たいかい)大商人」だ、という信念を宿している。それ故に、面目というところも考へる。要するに「蔵前を身代にする」といふのが、蔵前式男伊達の本領である。」(三田村篤魚)から寛安永(一七七一)から寛



(上) 歌川廣重「名所江戸百景」より「浅草川首尾の松御蔵河岸」(安政四年頃-1858年頃)。「首尾の松」の名称の起源は諸説あるが、舟に乗って吉原へ向かう通人たちが、この松の下で今夜の首尾が良いようにと願を掛けたというのが一説である。



(上) 廣重の絵と同じ場所から同じ方向を望む。現代の首尾の松。安永(1775)の初代から数えて七代目の松として植えられている。今は蔵前橋に隠れて水面は見えない。

政(一七八九)の初めにかけ、札差仲間から、大口屋(おおくちや)と、そのほか十八大通(だいとう)と称する頗る反抗児を生じた。「彼等は、三尺帯を締め、冷飯草履(ひやめしぞうり)をはき、料理屋などを荒らしまわする素寒貧(すかんびん)の自称侠客(じくやく)とあり、恒産(こうさん)があり、礼容(らいよう)が握つていながら、経済的弱点を握つていながら、そんな顔する時は、命を投げ出してグウの音も出ないほど武士をやつつけた」(矢田挿雲)。

この頃に書かれた書物に『御蔵前馬鹿物語』というのがあり、札差の行状を書き留めてある。また松浦静山公の随筆『甲子夜話』にも一部書き残されている。大口屋(おおくちや)は、本名を大口屋治兵衛(ごおくちや ちへいゑい)という。晩雨(ばんう)は、七二(ごじふに)の頃、蔵前の通人(とくに)の筆(ふで)で名物(なぶつ)であった。常に、黒小袖(くろこぶそで)の紋付(もんずけ)を着流し(しやうし)、絞籠(しぼりかご)の一日下駄(いちひつげ)を履き、日下駄(ひげ)の助六(すけむすむろ)のなりをして、吉原に繰り込み、悦(えき)に入つて、暁雨(あきり)は、二十五萬兩の身代を弟に譲り、自分は五萬兩(ごまんりやう)の遊蕩(うどう)をもつて八幡社(はつたて)前に隠居した。ここにいて別になすこともなく、吉原通いに精勵した。札差としては有名な男であるが、これといつた事績は伝わっていない。元禄(げんろく)の材木商(まきかひ)の紀文(きぶん)や奈良茂(ならしげ)の事績に比べれば、時代が下る分、都会的で小ぶりな印象が強い。

夏目成美(なつめ なるみ)は、夏目成美(なつめ なるみ)は、晩雨(ばんう)と同時代に生きた蔵前の札差であるが、晩雨(ばんう)とは正反對の性格で、馬鹿遊び(ばかあそび)などにうつつを抜かさず、家業(かごう)に精勵(しんりき)しながら、後世(こうせい)の名を残した。十七歳(じふしちさい)で家督(かとく)を相続(くわく)し、五代(ごだい)目(め)井筒屋(いづつや)八郎右衛門(はちらぶゑもん)を称した。随齋(ずいさい)、不随齋(ふずいさい)など多数の別号(わかごう)を持つ。俳諧(はいかい)は父の手ほどき(ほどき)以外(いそぎ)は独学(どくがく)だったといふ。家業(かごう)のかたわら俳諧(はいかい)を続け、江戸(えど)の四大家(よっぺん)の一人(ひとり)と稱(なづ)され、一目(ひとめ)置(お)かれる存在(そんざい)であった。小(こ)林(こばやし)一茶(いつさ)の良き庇護者(ひごしや)であり、何(なに)れも茶(ちや)の良き庇護者(ひごしや)とみたり。書画(しよゑ)などもよくし、金をもつて、貧乏(ひんぱん)俳壇(はいだん)に救済(きうさい)するなど、当時の俳壇(はいだん)に資金面(しきんめん)で多大(たいてい)な貢献(こうけん)をした。



(上) 浅草御蔵<江戸切絵図 尾張屋清七版 1850年頃>吾妻橋より1 Km下流の隅田川西岸に幕府の年貢米を貯蔵する浅草御蔵があった。この米は、主として旗本、御家人の給米用に供され、勅定奉行の支配下に置かれた。御蔵の建ち並ぶ西側の町人地(灰色の地域)に札差の屋敷が軒を連ねていて、ここを「御蔵前」と称した。四番堀と五番堀の間の河岸に首尾の松があった。現在はこの首尾の松の場所に蔵前橋が架かっている



(上) 現代の浅草御蔵跡。左に見える隅田川のコンクリート堤防が、お米蔵の土蔵のなまこ壁を模して化粧されている。前方の橋は蔵前橋。筆者撮影。

は、込み、悦(えき)に入つて、暁雨(あきり)は、二十五萬兩の身代を弟に譲り、自分は五萬兩(ごまんりやう)の遊蕩(うどう)をもつて八幡社(はつたて)前に隠居した。ここにいて別になすこともなく、吉原通いに精勵した。札差としては有名な男であるが、これといつた事績は伝わっていない。元禄(げんろく)の材木商(まきかひ)の紀文(きぶん)や奈良茂(ならしげ)の事績に比べれば、時代が下る分、都会(こゝろ)的で小(こ)ぶりな印象(いんさう)が強い。

夏目成美(なつめ なるみ)は、夏目成美(なつめ なるみ)は、晩雨(ばんう)と同時代に生きた蔵前の札差であるが、晩雨(ばんう)とは正反對の性格で、馬鹿遊び(ばかあそび)などにうつつを抜かさず、家業(かごう)に精勵(しんりき)しながら、後世(こうせい)の名を残した。十七歳(じふしちさい)で家督(かとく)を相続(くわく)し、五代(ごだい)目(め)井筒屋(いづつや)八郎右衛門(はちらぶゑもん)を称した。随齋(ずいさい)、不随齋(ふずいさい)など多数の別号(わかごう)を持つ。俳諧(はいかい)は父の手ほどき(ほどき)以外(いそぎ)は独学(どくがく)だったといふ。家業(かごう)のかたわら俳諧(はいかい)を続け、江戸(えど)の四大家(よっぺん)の一人(ひとり)と稱(なづ)され、一目(ひとめ)置(お)かれる存在(そんざい)であった。小(こ)林(こばやし)一茶(いつさ)の良き庇護者(ひごしや)であり、何(なに)れも茶(ちや)の良き庇護者(ひごしや)とみたり。書画(しよゑ)などもよくし、金をもつて、貧乏(ひんぱん)俳壇(はいだん)に救済(きうさい)するなど、当時の俳壇(はいだん)に資金面(しきんめん)で多大(たいてい)な貢献(こうけん)をした。

西岡恒憲(せいおか へいけん) 四二回

品川は江戸日本橋より南に二里、高輪大木戸を出てしばらく歩くと品川宿の入り口(八ツ山口)に着く。広重の「東海道五拾三次」に描かれている東海道第一番目の宿場である。江戸四宿(江戸の四街道)それぞれの第一番目の宿場である品川、千住、板橋、内藤新宿のこと。はそれぞれ日本橋から二里程度の距離で、江戸の一部と言ってもいいくらい近さであったため江戸の人々は「四宿を江戸の端っこぐらいい見なししていた。品川は江戸時代以前から漁港・商港として栄えた大きな港町であった。天保十四年(一八四三)の調べでは、商いの店が六百一軒あり、三十一の業種別になっている。なかでも一番多いのは宿場らしく旅館屋で百一十一軒、次に水茶屋が六十四軒で続き、質屋も四十軒ある。大名の参勤交代の行列は、日本橋を七ツ立ち(午前4時)して二里を二時間かけて歩き、夜が明けるところ品川宿を通ることになる。逆に参勤のために江戸へ入る大名は、品川宿で小休憩し、それまでの旅装束を改めて江戸屋敷に入り、その日のうちに江戸に着いたことを老中その他の関係者に報告に出かける。

品川宿の西側一帯は台地になっており「御殿山」と呼ばれていた。江戸時代中期以降に春は桜の名所として賑わった。御殿山の桜は寛文年間(一六六〇)に吉野山から移植したものと見られていて、江戸庶民の花見の場所として整備されたのは、享保年間(一七一六)に八代将軍吉宗が江戸庶民の娯楽のために御殿山(品川)、飛鳥山(王子)、隅田堤(向島)、小金井(多摩)などに植樹を行った。これがのちに江戸四大桜の名所とよばれるようになった。春霞のかき三月(陰暦)、御殿山は桜の花の香りに包まれ、品川沖に浮かぶ白帆とそ

の先に房総半島が一望できる景勝地として有名だった。品川は街道筋に沿って両側に茶屋や旅館屋が二百軒近く軒を並べていた。江戸四宿のうち品川は、唯一海に面した風光明媚な宿場で、旅館屋は食売女(めしもりおんな)や飯盛女(めしもりおんな)の名目で多くの遊女を抱えていた。品川は江戸から遊びに来る遊客が多く「北」の吉原に對する「南」「南国」と称される

「御殿山の桜」
品川宿の西側一帯は台地になっており「御殿山」と呼ばれていた。江戸時代中期以降に春は桜の名所として賑わった。御殿山の桜は寛文年間(一六六〇)に吉野山から移植したものと見られていて、江戸庶民の花見の場所として整備されたのは、享保年間(一七一六)に八代将軍吉宗が江戸庶民の娯楽のために御殿山(品川)、飛鳥山(王子)、隅田堤(向島)、小金井(多摩)などに植樹を行った。これがのちに江戸四大桜の名所とよばれるようになった。春霞のかき三月(陰暦)、御殿山は桜の花の香りに包まれ、品川沖に浮かぶ白帆とそ



(上) 江戸切絵図(安政四年-1857)にある品川宿。町割り、北から、徒歩新宿(かちんじゅく)、品川北本宿、品川南本宿となっていた。宿内を流れる川は目黒川。街道の山側には桜の名所御殿山がある。



(上) 歌川広重<保永堂版 東海道五拾三次之内(天保五年-1834)>より『品川日之出』。上地図の青い矢印の方向を描いたもの。街道の両側に茶屋や旅館屋が軒を連ねていた。とくに海に面した旅館屋は、江戸湾から房総半島まで一望することが出来たので、多くの旅人で賑わった。

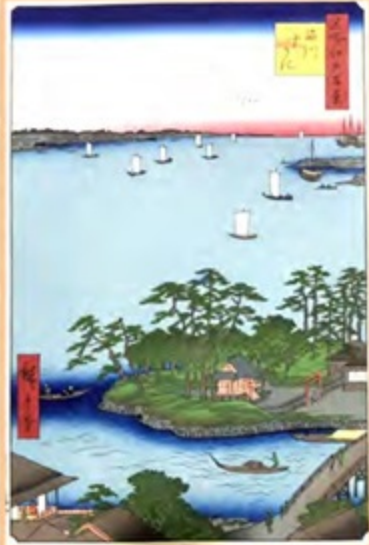


(上) 歌川広重<江戸名所(弘化年間-1844~48)>より『御殿山花盛』。桜時には江戸からの花見客で賑わった。四大桜名所の一つで眺望がよく品海や房総が一望できた。



(上) 上図と同じ場所から筆者撮影。左側の建物の東側は全て埋め立てられて海は全く見えない。左下に立つ記念碑には「東海道八ツ山口 右品川宿」と刻まれている。

「土蔵相模」といった。吉原に負けないうら立派な旅籠屋(妓楼)もいくつもあり、品川で最も有名な妓楼は「土蔵相模」といった。〈英国公使館焼き討ち事件〉土蔵相模は幕末に水戸や長州の血気盛んな壮士が特まり酒を飲み女を待らせ天下国家を論ずる場所であった。



(上) 歌川広重<名所江戸百景(安政-1854~60頃)>より『品川すさき』。上地図の赤い矢印の方向を描いたもの。手前は目黒川の河口。左下隅に描かれているのが有名な妓楼「土蔵相模」である。右上海中に見える土盛りは黒船対策のため築かれた品川お台場(砲台)。



(上) 上図とほぼ同じ場所と思われる現在の御殿山の東端から筆者撮影。品川の東側の海は埋め立てられビルや建物が建ち並び全く海は見えない。



(上) 街道に面した「土蔵相模」跡。現在は小さなマンションが建っている。街道に面した表に史跡であることを示す説明版がある。筆者撮影。

文久二年(一八六二)十二月十二日夜、長州の攘夷壮士十名ほどが土蔵相模に集まり、ある計画を実行しようとしていた。それは背後の御殿山に建築中の英国公使館を焼き討ちしようというのである。夜中の一時頃土蔵相模を出た一行は雨の中英国公使館に至り、放火した。九割方建築の終わっていた公使館は灰燼に帰し、その後、幕府は英国との交渉に苦勞することになる。この時の壮士一行の中で主だった者は、高杉晋作、久坂玄瑞、井上聞多(鷹)、品川弥二郎、伊藤俊輔(博文)、というような後の世に知らぬ者なき人達。彼らもこの頃はまだ血気盛んな攘夷主義者であった。

